

る日本海北部は当然のことであるが、風速の弱い東朝鮮湾、若狭湾付近にもみられる。

4. むすび

簡便な20cm海面蒸発計を開発し、観測結果を舞鶴港と沖合いに分けて、それぞれの蒸発実験式を作製した。四季別の蒸発量では観測場所の水深の影響、つまり熱容量の差があらわれており、冬は沖合いに多く、沿岸に少なく、夏・秋は沿岸に多いことがわかった。昼夜の別では、受熱量の多い昼間に蒸発量が多いこともわかった。また、空気力学的方法により1968年1月の日本海海面からの蒸発量を推定した。計算には第2節で得た沖合いの実験式を使用した。計算には第2節で得た沖合いの実験式を使用した。計算には第2節で得た沖合いの実験式を使用した。計算には第2節で得た沖合いの実験式を使用した。

$$E=0.214(E_w-E_a)V-0.147$$

となる。これを用いて蒸発量分布を得た第12図は従来から計算されている蒸発量分布の平年値(藤田・本田, 1965)とは大きな差がないことがわかった。これは海面

上12.2mの風速(第2表よりの平均風速4.1m/sec)を用いているので、海面上6mに換算して整理すると

$$E=0.128(E_w-E_a)V-0.147$$

となる。また、常数を省略すれば Jacobs の得た係数0.143に近い値となる。

おわりに、この調査の機会を与えられた北田・山本・青木・喜多村の歴代台長に厚くお礼申し上げますとともに、観測・調査をすすめるにあたって海面蒸発計の作製はじめ、種々の御指導をいただいた当時の井野海上気象課長、観測に協力下さった大島海上気象係長ほかの皆様深く感謝致します。

引用文献

- 伊藤昭三, 1968: 蒸発量観測の現状と将来展望, 電力と気象, **17**, 125-133.
 藤田敏夫・本田庸浩, 1965: 冬期の日本海からの蒸発量及び顕熱放出量の推定, 天気, **12**, 204-212.
 藤田敏夫, 本田庸浩, 1968: 短時間の蒸発量の測定, 日本気象学会 秋季大会講演予稿集, 302.

第15期 第9回常任理事会議事録

日 時 昭和44年6月30日 15:00~19:00

場 所 気象庁予報部会議室

出席者 山本理事長 大田 毛利 根本 有住 朝倉
岸保 大井 神山 小平 各常任理事

列席者 須田理事 藤田哲也会員

議 題

議決事項

1. アメリカ気象学会との Jointmeeting について
開催の主旨には同意するが目下の諸状況からみて、1971年以降に行なうこととなろう。その時期に改めて検討する。

2. 九州大会のシンポジウムの題目について
九州支部から「降雨機構とその応用」としたい旨申出があったので、同意する。内容は雲物理、メソ解析、人工制御とする。

3. 外国文献集について
30巻とし3年間で刊行する。価格は1巻700円~800円とし送料は購読者負担とする。

承認理項

賛助会員トーテックスKK, 通常会員安井春雄
外19名の入会を承認する。